

---

月 刊

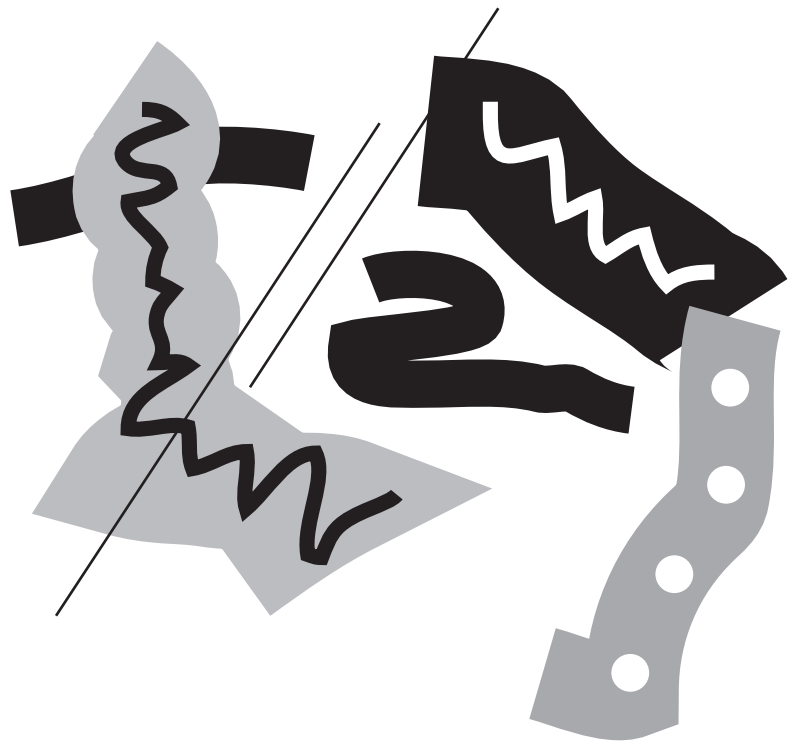
---

# MéLange

---

VOL.81

---



---

2013.05.26

詩/エッセイ

---

月刊  
「Mélangé」  
VOL.81

2013/05/26

月刊「Mélangé」  
編集部

◆採譜

どの耳が  
どの道を辿り  
その場所へ行きつくのか  
深く閉じられた夜空の  
億光年の星明りを探りながら  
薄い鼓膜に掬い採る音  
言葉でありながら  
言葉でない  
だが 五線紙のうえに置き換えられた約束は  
音符と呼ばれて取まり  
道をゆくひとの標となり  
散り光る河の水になり  
かりそめの歳月へ積みゆき

上野都

繰り返してきたようでいて  
ただ一度きり  
それでも 取められたものは  
立ち上がり 伏し  
潜り 浮かび  
漂い 昇り  
ひとを越えて ひとへ戻って来よう  
歌うことも  
弾くことも  
ただ一度きり  
約束は果たされるたびに掻き消え  
消え残ったものだけが ひとになり  
探り 掬い 採るひとの  
細い指が契る熱い言葉  
やわらかに降る星明りを肩さきに光らせ  
歌うひとは立ちつづけ  
弾くひとは立ちつづけ  
消え残った約束  
濃い影を映すひと。

詩

81号巻頭作品 採譜	上野都	3
抱擁	岩脇リーベル豊美	4
ラパン・アジル	にしもとめぐみ	4
連想ゲーム3	野口裕	5
ニワゼキショウを	川田あひる	6
座標は喪われる	千田草介	7
部屋になぜ詩が散らばっているのか	月村香	8
目深にかぶり	大橋愛由等	9
川辺に立つ人々	中堂けいこ	10
ニッキ、今日は?	高谷和幸	11
ウニオ・ミステイカへの一階梯	有時秀記	12
銃身	寺岡良信	13
渚(詩法)	富哲世	14
エッセイ		
△詩人通りより▽5 「詩人の死—死人の詩」	岩脇リーベル豊美	15
△夜の調べに寄せて▽48 「鷹取山の空深し」	寺岡良信	16
新連載さまよう星座詩学▽1 「双子座 ガルシア・ロルカ」	安西佐有理	18
△神戸詞あしび▽70 「台湾のあの時代に漂う空気をおもう」	大橋愛由等	20

編集部日より★01/第81回「Mélange」例会は、5月26日(日)に開催。第一部の読書会では、木澤豊さんに宮沢賢治の「風の又三郎」を語ってもらう。去年の「春の修羅」に続いて二度目の「賢治語り」である。／この読書会のために何年ぶりか分からないが、「風の又三郎」を読む。「雨はどっこどっこ雨三郎、風はどっこどっこ又三郎。」と誰が歌い出した分からないうたに風の又三郎がおびえまじりに敏感に反応している。そのうたは呪詞のようでもあり謎めいているのだ。(大橋記)

◆抱擁

きつい抱擁を躊躇わず  
 この火のそばで  
 いま最後に会えてよかった  
 あなたに  
 六月の焚刑  
 今日を分水嶺にして  
 あなたは熔け流れる

ひと筋の現実  
 わたしはあなたと  
 死だけをともに経験していない  
 体温から彼岸の定義をする  
 六月が指を張る  
 骨が素晴しく燃えあがる

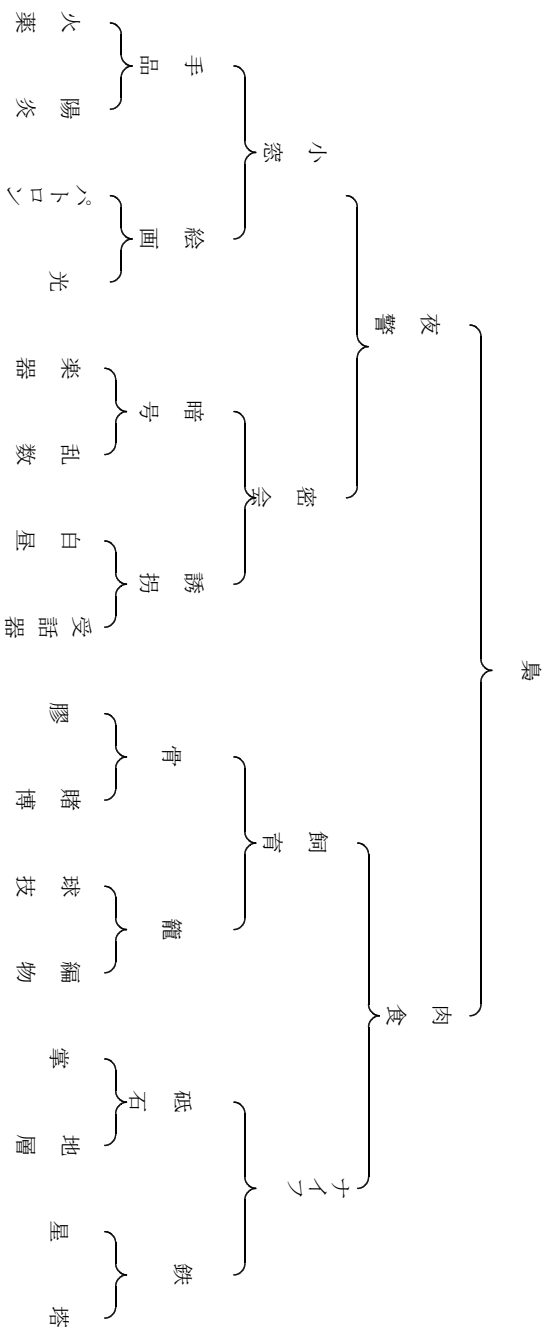
◆ラパン・アジル

モンマルトルの丘の上  
 薄暗い室内  
 黒光りするテーブル  
 背筋をのばした  
 シャンソニエにシャンソニエール  
 輪唱するように歌いだす  
 年老いたピアニストの指先は  
 奏でだす

モーリス・ユトリロ  
 イーゼルを立てかけた  
 雪の日も  
 晴れた日も  
 三百五十枚も描いたラパン・アジル(シャンソン酒場)  
 ムーランギャレットを通り抜け  
 坂を登りつめて  
 緑の鎧戸  
 赤い屋根  
 私たちの思い出はもう一度  
 ユトリロの絵の中に閉じこめられた

岩脇リーベル豊美

にしもとめぐみ



連想ゲーム3

呼ばれたことはないのだが  
 天というものが  
 立派な舗装道路の上を  
 走り回っている  
 クラシックカーや  
 馬や牛  
 犬は紐付きで  
 主人に牽制されながら  
 それでも走り回り  
 神話というものを  
 日々纏っているらしい  
 気まぐれなドリブルや三点シュートを  
 入れたの外したのが  
 媚薬となつて  
 目つぶしとなつていようが  
 舗装道路は舗装道路で  
 盲目となつても  
 声を頼りに  
 進まなければならぬのだ  
 道路清掃夫は天使と呼ばれ  
 動かない車や物を  
 突き飛ばし  
 ぶつけ合いながら動かして  
 鼻歌を歌えば  
 そこから湧き上がる  
 蠅の羽音が頼りなく  
 高速で湧き上がり  
 舗装道路上のルーレットが  
 胴元に回収されると  
 折りという利子は  
 ほそぼそついて  
 涼しげなカクテルにちりちりと唾される  
 賑やかな飾りぐらいいはなるのだ

野口裕

## ◆ニワゼキシヨウを

川田あひる

親族の  
バスをおりと  
美しい光景がひろがっている  
ここが岐路  
順路に従い進んでいたが  
曲がると  
崖肌が海にせりだして  
人ひとり通れない  
そこを行けば海に倒れる  
座り込み 前へ 先へ  
試みる勇氣も萎え 断念し 引き返した  
灰色の 濃淡を おそろおそろ歩み  
それはわたしの精神に自業自得の傷となって

消えることはない とおもわれた  
が、父は瓢箪を作った  
毎年 丹精の瓢箪を作った  
大きいの 小さいの さまざま 七年かけて  
いちばん いびつを  
わたしに与えた  
五センチ足りなくてもなんとかなる  
一センチ足りなくてもできなかったぞと 与えた  
いびつな瓢箪に わたしは  
窓をあけ  
ニワゼキシヨウを一輪挿した  
忘れがたい光景は  
くりかえし夢に現れたが  
なつかしの 雨だれ聞くように  
まぼろしのように  
挫折は  
かなしく  
輝いた

## ◆座標は喪われる

千田草介

墓室に通じる回廊は六分儀と血圧計で測量  
されたにもかかわらずクロノメーターに狂  
いが生じたがために黄泉をゆく船は針路を  
はずれ舳先の鳩時計が無精卵を生み落とし  
てしまい古代都市の外港を目指そうと巫女  
を抱きすくめても神託はなく配管は破れて  
汚水が船底を浸し腐臭が板張りの隙間から  
漏れ出て塩を撒いても湧き出してきた蛆虫  
たちはたちまち蛹になり羽化して船の形を  
なぞり金属光沢で覆い尽くしたので遮光器  
をもたない土偶どもは太陽神の威光の反射  
に眼がくらみ口述で航海記をのこすほかな  
くなつて死亡暦1436・8781とか磁  
気テープに声を貼り付けるのだが再生しよ  
うとするとメリーさんの羊を歌う発明王の  
ひどい声が聴こえてくるばかりで記録のこ  
ころみはすべて徒勞に帰してしまい海図が  
示すものも無意味となるのでいつそメルカ  
トル図法を放棄して須弥山図を用いたほう  
がよいのではないかと鳩首談議するも小田  
原評定のうちに船は山をのぼりオペラハウ  
スの軒先に座礁する。

## ◆部屋になぜ詩が散らばっているのか

月村香

タクシーをやり過ごしてもうつかまりはしないかと歩いて帰った次の朝床には数枚の詩片が散らばっているわたしはある人を愛したそのベクトルの力で詩は生まれたのか知らぬ間に顔を掻きむしってつめに血がつく何があってもいい愛することを止めてはいけないひよっとするとその正体は母性であるかも知れないそしてそのベクトルはこうだ朝子どもを玄関まで見送ったあと寂しくいつまでもそこにうずくまっているもうひとりの娘がもうお姉様は行ってしまわれたわよとわたしに言うだろうわたしはしばらくしてからポツンとそうかのため息をつくのだ以上はどうしても信じてもらわなければいけないことだ

## ◆目深にかぶり

大橋愛由等

〈公園に向けて吹いてくる風の数をかわたれ刻から数えている徴税官がいたのでフェルト帽を目深にかぶり直して黄部屋に入室するだろう〉〈その部屋は補色に満ちていて否と云うためにしつらえられてあるのだが心かきむしられるほどの妙なる安堵がたちこめているのだ〉〈一歩踏み入れるや「今日モ永イ一日ガ始マル」とため息まじりに語りつつもそれは毎日繰り返している生きるための呪詞であることは充分にわかっているつもりであろう〉〈それから籐椅子の数をかぞえてみるのだけれど二脚であることに変化がないことは知っていてもひとつふたつと数えたあとに一息ついて今日も椅子が自己増殖していないことを確認するのだろうか〉〈窓際に置かれた猫足テーブルの上には鏡が置かれていて窓越しの上空を飛ぶ山ウズラの鳥影が鏡に映っていることを見ながらこの鏡にはいったい何羽の山ウズラを棲まわせているのかと考えるに違いはないであろう〉〈その鏡は自画像を描くための道具であることは分かっているけれどキャンバスではなく他のなにかに自画像を表現することを強いられるだろう〉〈猫足テーブルの引き出しの中や枕が二つ並べてあるベッドの下に「喪失」が隠れていないかどうか探索しながらもふと目頭に湿潤を感受するのはそれが涙と分かるには少しく時間がかかるであろう〉〈黄が割れ補色が半旗をかがけ隠れていた「喪失」が無遠慮に顔を出し山ウズラを一羽も見いだせないその日には自画像を表現する手を止めてぎっくぎっくと鏡を切り裂く音が聞こえてくるだろう〉

## ◆川辺に立つ人々

中堂けいこ

理由というものは問われて初めて成り立つものだ。私を取り巻く人々はすでにそうあるかのような錯覚を錯覚とも思ってもせず、すでに川辺に居ることがあたりまえのように振る舞うのは何か川の由来と繋がりがあつたらしい。

「上流から洪水がやってくる」例のリーダーらしいふくよかな女性が一言、吐息のように囁いた。

「洪水が来る」「洪水が来る！」人々は口々に囁いた。その声は徐々に大きくなり、あたりの草叢のあちこちから上がり始め、やがて声を揃え唱和するように、コウズイコウズイ！と叫びだす。人々は恐れているようでまた激しく望んでいるようでもあり、私にはわからなくなる。

川の上流のはるか先は右に湾曲していてその先は窺い知れない。洪水はそのあたりから噴き出すのだろうか。果たして洪水の先端はどのような形状をしているものなのか。

私の傍らに立つ人が顔の記号のような眼鼻立ちを歪めて

「もうすぐ洪水がやって来る」と言う。私はここに居るのは危険じゃないかと言うと、洪水を見てからでないところから去りたくないと言う。果たして洪水が来てからでは逃げられないのではないかと、なにげなく口にする傍らの人は眼鼻をへのへのもへじに並べて右側をじつと見るばかりになつた。まわりの人々はますます盛んに洪水がやって来る洪水がやって来ると叫び囁し立て、何か偉大な神さまみたいなモノを崇め待ち焦がれる様が尋常なことではない。ふとここで何か、と理由を問えば、へのへのもへじはへの部分を平たくして私たちがここに居ることの理由ではないと答えた。そうだ、聞いてはならないのだ。すでにこうしてあるからには、おそらく洪水はやって来るにちがいない。

皆が立ち上がり両足でどんどんと地面から飛び上がった蹴散らしたりして、洪水はいましも川の山土手から顔をだしそうに思えた。ある者は洪水の顔、という言い方でそれは水で出来た女神の表情なのだと言う。水柱を従えてどうどうと走りくる女神はまたたく間に川岸から土手を襲い近隣の草原や森を覆いつくしていくのだと言う。皆が是非とも洪水の女神さまを拝みたいものだと言う。洪水が来る、洪水が来る、それは女神ガイアの面立ちと猛々しい水の身体で、怒涛になつて私たちの上流から現れるはずだ。もうすぐやってくる。洪水。すぐそこまで。前触れの水柱がすぐそこで立ちあがりはしなかったか。

## ◆ニツキ、今日は？

高谷和幸

やさしい退廃は終わった。わたしの庭は泡のようなものだから、膨れ上がったからだを針で刺すと、飛び散った薄片（ミトコンドリア+葉緑体）は、庭から出られない空っぽのアルミ缶の疲労がいい感じで残る。それからの二週間といえば、強風（何度でも骰子を振るように）がからだの軽さを揺すりつづけた。かすんでいく空、空（わらい）が消えていく。引っぱられた開け口は黙りこくっているが、冷え続ける胴は生き物の言葉の記憶をとどめている。穴から覗けばあれは馬（耳でもあるし、いまでもそれは耳だろうか）で、泡になるまえの（一歩も動かない）を（吹き込まれて）いる一本のペンのとんがり。泡になつてしまえば、わたしは馬だと思ふのも一つの結末だろうが、内部の疼きがこぼれ出すのは、群居動物的な馬（おなじ親から生まれながらお互いを知らない）がもう一つの自我という回路だからだろうか。用心するがいい。あまりにも人間的な真つ黒な空があり、ふわりと吹き出しが浮かんでいる。純粹に表面だけの旧くて新しい今日という生き物。庭の上の。

## ◆ウニオ・ミステイカへの一階梯

有時秀記

A noir, E blanc, I rouge, U vert, O blue  
(Voyelles)  
Je est un autre. — (Lettre de voyant)  
…………Arthur Rimbaud

肉体に内在した余剰を捨てるために、騒々しい約束事から離脱し、荒野を遍歴していた行人が流星のように帰還するや、過去と未来が交差する墓所に佇む。墓所で感じる行人の内的時間意識は、地の底と天空の彼方を瞬時のうちに垂直に突き通す超感覚的内在性を帯びているが、荒野からの帰還者たる行人は、その墓の場を瞬間瞑想の場とし、あらゆる時の痕跡を超越する。稲妻とともに光速の走馬灯が回転し、彼方の知恵の書に記述されたとおぼしい声論のこだまを脳裏に感じる。行人の脳内シナプスはこのとき、複雑だが喩的な象徴文法の化身である。彼方の知恵の書を解読するのは稲妻の光とともにたらされる象徴文法によつてであり、その文法は異質なものが融け合うことでもたらされる。

「Aは黒」、言語音と色彩の舞踏。二つの異質なものの錯乱と融合を経て、見者へと突破する道をつた「母音」筆記者が指し示す共感覚。このシナスダシアの炎は、構成の抽象画家がチューブから絵の具を絞り出すと色彩が踊り出すという静かな熱狂の炎に同定する。「Aは黒」は合一のためのひとつの階梯。音と色の融け合う憑依の熱は、ウニオ・ミステイカへの羽根車である。冥

## ◆銃身

織女星は織りつづけた  
破れた戎衣を繕ひつづけてくれるものは  
もうその星の瞬きしかない  
役割は終はつてしまったのに  
乾坤を分かつ銀河に撃ち込む  
険しい夜明けの猜疑が  
死者を永遠に苛立たせる

幻のルビコン河  
何も彫られてゐない墓標  
自分が万骨でしかないことを  
つひに知らなかつた  
無知で残酷な野心  
ああ 潮騒に交じつて明滅するひかりが  
無垢なその女なのだ  
塞ぐすべのないおのれの空洞を  
沖から告げられたとき  
あのザンパノさへ  
誰憚らず泣いたではないか

明日も葡萄色に黄昏れる五月の海よ  
繰り返し陽炎に溶ける錆びた銃身が  
わたしだ

界への結界の場で、熱の羽根車は行人の脳内に垂直に舞い降りる。前頭葉の象徴文法は、瞑想のなかで音素と色素の舞踏を純粹に持続させ、かくて舞踏の内在律は融け合いながら純粹音楽そのものと化する。そうして死の壁を突破するウニオ・ミステイカへのたしかな幻夢をもたらすだろう。

幻夢のなかでは、私のなかの他人も他人のなかの私も消え、消えた両者の背に隠されていた羽が開く。墓所が形づくる結界のドアを蹴つて、開いた羽が一步踏み出すと、色素と音素の共鳴の熱を帯び、飛翔する鳥に変身して羽の心臓は輝きをます。この聖なる心臓はそのままに上昇すると、黒白赤緑青の五色の羽が音楽を奏で、その音譜は踊りながら彼方の知恵の書の声論の消息を伝えるだろう。微熱のなかで、まだら模様の鳥が明け方に飛び立って行く時刻に。

「補遺Ⅱ一九二七年の現存在分析論の伝承偽作」  
現存在は死をあらかじめ意識し、死へ先駆するという先構造をもつ。そのことによつて、実存は先駆的覚悟性をもち、先駆的覚悟性をもつゆえに本来的な現存在である。そのような分析にしたがつて「現存在の本質は実存である」との命題を残した三十八歳の分析者が、仮の宿で百歳翁に変身して語ったところによると、死へ先駆する意識は神秘的合一を死との合一へ変換する秘法中の秘法である、という。先構造の先端は、進化論を補完し、超次元の死後の生へ参入する霊的進化へのまえぶれでもある。そのため彼方を指し示す《Je est un autre》は幽霊のいぶきを伝え、その骨格をなす。

寺岡良信

富 哲世

五月の波打ち際によこたわる  
濡れた砂の柔肌にまぎれて  
黽深い沖の笹の碧に染まり  
育った一粒の黒真珠のような歪んだガラス石  
それはかつて巧まざるよきの酒精を醸す  
どんな酒瓶のカケラだったか  
腰かける老婆の  
長いエプロンスカートの足下に転がる  
石ころに見まがう追放された魂の  
どんな干からびた来歴だったか  
揺らめく水の陰影を追う魚の頭骨を抜け落ちた  
夜の瞳だったか  
生誕と水泡のあわいの苦しみの果てに取り残された  
小さな巻貝のなきがらといつしよに  
風に靡く波の手の絶え間ない  
規則正しいきまぐれに磨かれて

浜辺ではいま煮られようとして水着に着替える  
ミノタウロスのくずおれる白昼の半身から  
油に汚れた二本の角が生きたリボンのように  
傷んだ漁網の切れ端を纏いもだえながら空中の発火に繋がろうと  
している

はしゃぐ子供らの歓声が水しぶきを上げ  
日差しが波間にきらきら刺さり  
思えば長い一生だった  
垂れる教訓など何ひとつないが  
突堤の外れで釣人がさかなを釣り上げ  
犬がボールを追いかけている  
一生は過ぎ行くこの午後の燃える永遠のようだ  
暗い虹を嚙む灼けた香水壘の小さな世界の上  
かぶりをもたげて眺めるハマボウフウの砂原で  
汐に打たれた枯れ色のカマキリがクレールン車のように鎌を振り上  
げ  
渡る微風に立ち向かっていたあの遠い夏の日  
ああんて美しい太陽！  
誰かがどこかでいつしようけんめい手を振っている  
過去のようになつすぐに海に続いて消えている足跡を目で追いな  
がら渴いてゆくと  
まばゆい空無の広がりななままるでからだが見えないものの重さ  
に  
置き去りにされていくようだ

漂う藻草の細枝にからめ取られて亀の子が打ち上げられる  
かつて泣き砂海岸と呼ばれていた湾のなだらかな海岸線の渚の起伏  
を  
ひとの姿の自己影を負い  
さわれぬものとなって  
黒いガラス石は波に洗われ光を抱いて  
すたすたと東へ歩いていった

サラ・キルシュが死んだ。死んだというより死んでいたことを昨日フランクフルター・アルゲマイネ新聞のオンラインで知った。その急死以後二週間以上経って、彼女の詩集を出版してきたDVA社が伝えた。葬儀は親族のみで行われたらしい。まだ他のどの新聞も取り上げていないとき、Facebookのお知らせボタンを押したら、同人活動をしている詩工房のベティーナがすぐに反応、その日偶然予定されていた会を追悼に当てた。この詩人の死に非常な喪失感を感じる。

サラ・キルシュは1935年、第二次世界大戦後には東ドイツ領

## 詩人通りより／5 詩人の死—死人の詩

岩脇リーベル豊美

となるテューリンゲン州に生まれ1977年まで旧東独に過ごしているが、60年に詩人ライナー・キルシュと結婚。その頃から詩を発表し始め、サラ・キルシュの名で著作を続けていた。本名はIngrid Hella Irmelinde Bernsteinという。三つのファーストネームがすべてドイツ語の女性名以外の何物でもない。サラという筆名はナチスドイツの第三帝国におけるホロコーストに対する抗議として自分に授けた名前であるという。旧東独出身者で、ジャクリーンとかジャネットとかあまりドイツ的ではない名をもつ人が多いのはこのためである。

65年には夫婦で出版した詩集『恐竜との対話』はじめ多くの詩を公表するが、68年夫との離別後、東ベルリンに移りジャーナリ

スト、翻訳家としても働いている。そこで、社会主義者でもあり詩人でもあり歌い手でもあるヴォルフ・ビアマンが自らの東独政府批判の活動により市民権が剥奪されるという事態に抗議し、声明の先頭を切つて署名をしたことから、ドイツ社会主義統一党と東独作家協会から除名されてしまう。77年に西ベルリンに移住。83年に北のシュレスウィク・ホルシュタインはティールンヘムに移る。生物学で学位をとっていたこともあつてか、サラの詩には遍く社会批判のみではなくその牧歌的叙情的風景があると、いま改めて思う。

詩工房でとりあげた詩は『赤鷲Milan』だが、フランクフルター・アルゲマイネ誌が翌日、彼女の最も有名な詩として掲載したのは『追い風Rückenwind(1976)』。サラ本人は生前この詩をまず恋愛詩として書き始めたと言っている。ただ、独裁国家の条件下でのシュタジによる抗議的な詩人の監視を呈示したとする従来の解釈は変わらないう、ないであろう。

### 『追い風』

この宵、ベティーナよ、すべてが  
以前のままで。いつも  
私たちは孤独だね、君主らに  
書状を寄せるときは  
心の君主ら宛にも  
かの国の君主宛にも。けれどまだ  
私たちの心は怖れているね  
この家の裏がわに  
車の音が聞こえるときは。

(拙訳、合掌。)



安保条約の強行採決が国民各層の猛反発を招き、罵詈雑言の嵐の中で岸内閣は退陣した。替わって登場した池田勇人首相が、独特のダミ声で「私は嘘は申しません」と、「所得倍増計画」を打ち出したのは、昭和三十三年の十二月だった。その翌々年、私は大黒という名の小学校を出た。中内社長率いるダイエーが安売りを掲げて店舗を拡大し、高度経済成長はようやく軌道に乗りはじめたものの、町中にはまだ防空壕の跡があり、焼夷弾に顔を焼かれたオバサンがおり、傷痍軍人がアコーディオンを鳴らして金銭を乞う光景があちこちで見られた。私が育った地域は、長田区と須磨区が複雑に入り組んだ、いわゆる場末の商店街で、ガラの悪く教育水準は高くないと周囲から見なされていた。それが証拠に、経済的に少し余裕のある家庭の子どもの中には、卒業後は、神戸市内でも至って評判の良い校区のO中学に行くのを嫌って、T中学やN中学に越境入学する者が少なくなかった。その手口は、親戚か知り合いの家に住民票を移し、あたかもそこに居住しているように見せかけて、その校区の中学に入学する手続きを「合法的」に済ませるのである。私の父はそうした姑息で小狡いやり口を、罵倒していた。負の資質ばかり父から受け継いだ私の性格の中で、こうした「叛骨」だけは生涯変わらなかつたと、今は多少の自負を自分に許している。

貧困家庭を多く抱えたその小学校では、先生方が実に熱心で様々な試みをしてくれた。学校貯金というものもその一つだろう。校区の郵便局と連携して、通帳を児童に持たせ、毎月一度子どもが局員となって出納事務をこなすのである。それは郵便貯金の仕組みを知るという社会科の体験学習であると同時に、修学旅行に備えての費用の積立でもあつたらう。私の家も貧しい部類に入つてい

て、なにかにつけてせつやくしますが、病気の方にお金があるので生活の方は、苦しいそうです。私たちの事はしんばいしてお正月の着る服やくつを、買って下さいます。

早くおとうさんが丈夫になるとよいのにと、いつもほとけ様におねがいます。ほんとうに冬がなければ、おとうさんも元気で家の中は、ほがらかにくらするとおもいます。早く大きくなって働いて、おとうさんおかあさんを、たすけてあげたいとおもっています。今年の冬、おとうさんはげんきではたりますようにと、しんばいしております」

教育史に詳しい方なら、お分かりいただけるだろう。

あるいは『綴方教室』（一九三八年、山本嘉治郎監督、東宝）、『つづり方兄妹』（一九五八年、久松静児監督、東宝）、『にあんちゃん』（一九五九年、今村昌平監督、日活）、などの映画を観られた方もいるだろう。ここには一九三〇年代に始まり、戦後、『山びこ学校』の無着成恭や『新しい綴方教室』の国分一太郎らによって復活した「生活綴方」運動の名残がある。「生活綴方」とは、やや理想的に言うなら、子どもに自己の生活を直視させ、それを自分の言葉で表現することによって対象を正確に認識させ、問題解決能力の獲得のために知識を蓄積し思考を鍛えることを目的とした学習活動である。社会の矛盾や戦争の傷痕は貧困や母子家庭、父子家庭という形を取って子どもの生活と学習に顕在化するから、そうした子どもの綴った作文を教材化することを通して、社会を見る目が多くの子どもたちに培われる…と心ある先生方はそう考え、情熱と使命感をもつて推進した。

寺岡良信 NO.048

夜の調べに寄せて

鷹取山の空深し

だが、母親が見栄を張る性分で、たいていは百円程度持たせてくれる。しかし十円がやつという子どももいる。だが重要なのは、その日がどの子どもたちにとつてもハレの日で、十円の子はその子なりにどこか晴れがましい顔をしていたことだ。貧乏は不自由な境遇には違いなかったが、己の存在が否定されるような陰惨な暗さはなかった。このことを納得してもらうために、私は、この学校が力を入れていた作文教育の話をしなければならぬ。

「冬休みになると、お正月がきたり氷がはつたり、時には雪がつもってうれしいが、寒さがきびしくなれば、おとうさんは体が弱くなりねどこにはいつて、なかなかおりませんので、こまみます。

人もへびやかえるのように冬ごもりをして、春になれば出て働くのであればよいのにと、思います。三月ごろになると『早くしごとをみつめて、働かねばいけない。』と言つて、たくさん洋服を着て外出します。さむくなると、生まれこぎょうの、たいわんの話をして、『せんそうしたばかりにこんな寒い内地へ来て病氣ばかりして、いやだね。たいわんは正月でも氷をたべ、あたたくて生活がしよいのに。』と、言つてねどこでやんでいきます。ひきあげて十二年ほどになるが、冬でも働いたのは二、三年だけで、ほとんど冬ごもりで、ねてくらしします。おかあさんは『ありでも冬中の食べ物を買って、冬は地中の家で遊んでくらすのですから、私たちもまげずにお父さんの働いてる時にせつやくして、冬の三ヶ月の生活費をあつめておきましょう。』と言つ

マルクス主義を弊履のごとく棄てた私たちである。批判するのはたやすいだろう。だが先生方のこの努力が、ともすれば崩れそうになる子どもの尊厳を支え、生きる勇気を与え続けたことも、私自身が児童の目で見、確認した真実なのだ。

ウオタニ君という生徒がいた。水捌けの悪い場所に、粗末なバラックを組んで、大勢の兄弟姉妹が暮らすように暮らしていた。彼は明るく素直で、誰からも好かれていた。私は風呂屋で彼とよく一緒になった。落語が上手く、「たいらばやしか、ひらりんか、いちばちじゅうのもつともく、ひとつとやつつでとつきつき」を湯船で演じて、大人たちを抱腹絶倒させていた。ハーマニカも巧みで、「夕空晴れて秋風吹く」を私が覚えたのは、彼の指導の賜物なのだ。

最近彼を夢に見た。相変わらず汚いランニングシャツを着て、「塗りこべ」の顔で大黒小学校の校歌を歌った。

：青嵐北に連なりて、鷹取山の空深し：

人生の終わりを日々予感する今の私に、どうして彼が夢に現れたのかは分からない。その小学校で得た大ききことが、私の魂の根底に根を下ろしているという厳粛な事実を、今更ながらに発見した驚きなのかも知れない。母が取つて置いてくれたはずの小学校の卒業文集を、半日がかりで探し出して頁を繰ると、ウオタニ君は、こんな俳句を書いていた。

「卒業に別れ惜しんでちんぼう」

彼の目が生き生きと輝いていたと回想するのは、感傷だけではないだろう。そう思うと、本物の感傷が襲ってきて、ふいに涙が零れた。

「生活綴方」の最後の世代として



第一回 双子座

フェデリコ・ガルシア・ロルカと『ニューヨークの詩人』

Federico Garcia Lorca 一八九八年六月五日〜一九三六年八月一日 スペイン フェンテ・パケロス生  
 【西洋占星術プロフィール】太陽 双子座(冥王星、海星と合)、月 射手座(山羊座)、水星 牡牛座、金星 蟹座、火星 牡羊座、木星 天秤座、土星 射手座、天王星 射手座、キロン 乙女座、上昇宮 魚座、MC 射手座

小学生の頃には、占星術の本筋は巷で流布している「今月の○○座は恋愛運急上昇」といった一二星座占いでなく、円の中に星や星座の位置を配置したホロスコープ(占星図)を書いたり読んだりするのが基本だと知ったがために、たいてい小説も読まず詩も書かず、自分や他人の人生を勝手に凶にしたり読み解いては、その解に「美しい」と浮かれることで、長く過してしまっただけ。

それなのに、作品を作品として読むことを横目に、まだしつこく占星術の星座や星を持ち出すのは、それがイメージやシンボルの連関に溢れた体系ゆえに、もしかすると詩のご近所や裏手にあるような気がしなくもないからだ。未知に既知を重ねるのは、人の性。既知に未知を見出すのが、詩人の仕事。占星術は、どちらも映す鏡—というのは、言い過ぎだろうか。

もともとここでは、ごくシンプルに、次の星座へと毎月巡っていく太陽を追いかけて、個々の星座に因むお馴染みの人物なり事柄の周辺をぐるぐると、気が向けば惑星、小惑星に目配せして歩き、私的な詩的再発見への足掛かりにでもしたいと思う。

まずは、ロルカだ。この詩人・劇作家は意外にも、双子座の生まれであることしつかり(ちやっかり)自覚していたらしい。ハイメ・マンリケの「フェデリコ・ガルシア・ロルカと過した夜」(Jaime Manrique, "My Night With Federico Garcia Lorca")に「こんな一節を見つけた。

We were both Gemini. / Since astrology / was very important to him, / Federico took an interest in me.

救済の強度を持ち続けている作品群だ。実は正直なところ、伝統や民衆に根差そうとした『ジプシー歌集』までのロルカ初期の詩は、翻訳で読む障壁を割り引いても、目で読む詩としては心地よく受容するのが難しい印象がある。マンリケが、初期の『夢遊病者のロマンセ』に代表されるロルカ詩の、とりわけ朗誦詩としての一般的人気の理由を「韻と反復と力強い叙述を通して、偉大な演劇性が達成される」点(「安全な」ドラァグ)に集約し、一方で『ニューヨークの詩人』が「新たな真価を伝えてくれた作品」と認めるのに同感する。

ポール・バインディングの『ロルカ・ガイ・イマジネーション』(Paul Binding, *Lorca: the Gay Imagination*, London: GMP Publishers, 1985)も、ニューヨーク時代に着目してロルカの苦悩とその昇華の過程を考察していた。いかにも英米語圏の論者らしいというか、バインディングは、ステイブン・スペンダーを何度も引用(便利に援用)するが、言語文化圏を超える飛躍ぶりはナイーブなようで新鮮とも言える。たとえば「空虚のノクターン」の詩句「世界のすべての光が一つの瞳におさまる」(鼓直訳)を、アメリカとその世界観についての文化的評釈として、スペンダーの「主観的アメリカ、客観的ヨーロッパ」論、つまり、個人を超えた伝統に逃避できる客観的ヨーロッパの「歴史性」と、個人が個人として大陸や世界に結びつく主観的アメリカの「地理性」の対比や、主観の、受容的な面と逆に外に拡大して客観に転じる性質などで説明しつつ、詩集中で突出した作品の一つ「ウォルト・ホイットマンに捧げるオード」に繋げていく。ロルカが、主観と客観という対、スペインに置いてきた「もう一人のフェデリコ」(友人に宛てた手紙で彼自身が名付けている)とアメリカのフェデリコという「双生児」の間で、ひとつの軸を見出していくダイナミズムが、『ニューヨークの詩人』の魅力を支打ちしていることにも思い至らせられる。ちなみに、ホイットマンも、ロルカとホイットマンの両方に言及した詩を書いたアレン・ギンズバーグも、双子座生まれだ。

とにかく、九カ月間のニューヨーク(そして夏の短いバーモント訪問)、それに続くハバナの三カ月で、ロルカの作品や、創作者としての身振りは一変したのだった。そこに要らぬ後付けと意識はしても、ニューヨークに割り振られた星座が双子座なら蟹座であって、ロルカも蟹座に、ホロスコープ上で芸術や洗練、

星占いに夢中だったフェデリコは、自分と同じく双子座の、私に興味を持ってきた。

(日本語は太田晋訳『優男たち アレナス、ロルカ、ブイグ、そして私』所収。

青土社、二〇〇六年)

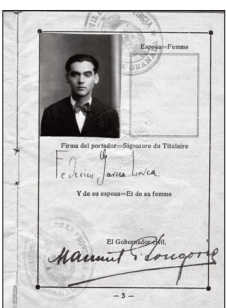
内容はさておいて形式上も、自由詩とはいえず、あまりに素直に書かれすぎていやしないかと一瞬そわそわしてしまうが(これに限らず英米語圏の同時代詩には、日本の「現代詩」の感覚からすると驚くほど真つ直ぐで日常の言葉の構造から遠くない表現に遭遇しがちと感ずるがどうだろう)、作者のマンリケがコロンビア出身ニューヨーク在住の作家・詩人であり、一九八八年のとある夕食会で、フランスの作家エドゥアル・ロダティから聞いた「一九二九年にニューヨークへ向かう途中でパリに滞在していたロルカと、一夜を共にしたとの話」を「詩に仕立てた」背景や、地理・時間・DNAの隔たりを超える「共感の血脈」とでも表したい繋がり、(歴史的な)語りの保管庫・声の再現としての詩の役割などを考えると、味わい深い。

その一九二九年、詩集や戯曲、絵画までが着々と評価を高めていながら、人間関係の問題やセクシュアリティに関する自己嫌悪などから精神状態が低調の極みに至ったのを振り切るようにアメリカへ向かった時期のロルカが、占星術に対して単純な相性占いや社交の方便として興味を持っていただけなのか、より深く自分を知るツールとみなしていたのかは知る術がない。けれども、「双子座」に結び付けられがちな、言語感覚や表現力に恵まれ、機知に富んだ会話が得意で、文筆はもちろん多芸多才といった性質は強く自負していたかもしれない、自分の「運命」の突破口を見つけようとする道のりで、外向けには快活に振る舞っても内面には複雑で矛盾を抱える二面性や二重生活といった、二つの体を持つ星座ならではの表象を自己に重ねて更に悶々としていたかもしれないといったことも、ロルカという存在を透過して、作品や身体で形づくられた三八年間の生の時間・空間の枠組みの奥行きを探るよう妄想着してみる。

その後、ロルカがアメリカ滞在を経て生み出した詩集『ニューヨークの詩人』は、旺盛な資本主義に動かされる都市の喧噪、貧困や退廃、偏見といった闇、技術や消費の渦に流されたり抗いうる人間の姿を描き、時代やニューヨークの独自性を写しつつ、二二世紀の今、翻訳でそれを読む者の心情にも突き刺さる告発と

親和力を表す金星を持つ「符合」を、拾った鍵が鍵穴に滑り込んで扉が開く必然の成就を眺めるが、ごくのさやかな喜びにしてしまうのが(あるいは「萌える」)のが、占星術の徒の気楽な性分だ。

ところで現在、そのニューヨークでは、大規模なロルカ祭「ニューヨークのロルカ」が四月五日から七月二日まで開催されている。『ニューヨークの詩人』の新しいスペイン語注解版や、写真や手紙の追加も含む英語改訂版の出版にも合わせて、ロルカのニューヨーク滞在期に焦点を当てており、要となるのはニューヨーク公共図書館での『ニューヨークの詩人』原稿の世界プレミア展示だ。展示は、ロルカが一九三六年にバルセロナの出版社に預けた原稿に付した「明日戻ります」とのメモから、Back Tomorrowと題された。実際はロルカが戻ることはなく、暫く後にはスペイン市民戦争に巻き込まれて銃殺死に至ったのだが、死後一九四〇年の詩集出版以降、長らく行方不明だったその原稿が初めて、ゆかりの品々と共に公開されているという。並行して、いくつもの関連企画―講演、人形劇、詩人や翻訳者によるロルカ詩の朗読、スポーツクワッドのパフォーマンス、コンサート(フラメンコのみならず、ジャズのベン・シドランや、ロックのパティ・スミスも参加する)、映画上映などが予定されている。現地に飛んで行きたいところだが、幸いイベントの多くはインターネットで音声を開けるし、ウォーキングツアーの代わりにインタラクティブマップで街の探検もできる。何しろ双子座は、新しい情報が好きな星座とされている。特に双子座が支配する五月下旬から六月にかかるこの時期、双子座生まれかどうかを問わず、流れに乗ってクリックしてみるのも面白いだろう。六月は、ロルカがニューヨークへ向けて旅をしていた月でもある。



アメリカ渡航期のロルカのパスポート

(1) Lorca in New York: A Celebration <http://lorcanyc.com/>  
 (2) Radio Lorca <http://antonan.org/series/radio-lorca/>



映画「セデック・バレ」より

父・大橋彦左衛門が、祖父である千代造に伴われ、一家をあげて台湾に移り住んだのが一九三三年（昭和八）のことであった。その三年前に「霧社事件」が起きているので、当時の邦人社会ではまさに同時代の出来事であったはずだ。

一家は台南市港町というところに住むことになる。千代造は、工場兼住居を借り「台湾アルミニウム工業所」という会社を興す。従業員を雇って生産を開始するのだが、一九三七年（昭和一二）三月に工場を閉じ、大阪・堺市に帰ることになる。事業がうまくいかなかったのだ。約四年間の台湾生活であった。

いま私の手元に父が書いた台湾生活の想い出記がある。それを読んでみると、日本人の小学校同級生のことや登場するが、台湾人の名前が出てこない。当時日本人と台湾人は小学校から中学校まで別の学校で学んでいたという制度上の事情や、日本人は邦人コミュニティの中で生きていたといった事情が反映しているのだろう。

## 台湾のあの時代に漂う空気をおもう

「霧社事件」を正面から扱った台湾映画「セデック・バレ」（魏徳聖監督）に登場するのは、先住民族のセデック族と日本人との二項対立が中心となつて物語は進行する。この映画における台湾人（華人）はニュートラルな存在なのである。

こうした位置づけに注目してみよう。この映画を二〇一〇年代に観ている台湾社会のマジョリティである華人は、外省人、内省人、客家人といった出

身別差異の中で生きている。しかし、この映画に登場する華人はそうした差異に関係なくニュートラルな扱いを受けている（戦前は外省人という出身別差異は存在しなかった）。つまり、華人というひとくくりの中で観賞できて、出身別差異とは関係のない世界なのである。これはすなわち、自分たちの住む台湾島で起きた歴史的事件でありながら、日本人と原住民という華人にとつての（第三者）が主役であるこの映画を通して、台湾の歴史や社会を客観視することができる。ひよつとして魏監督は、こうした台湾を描く作品の中に、第三者を措定させることで、すべての華人が同一のニュートラルな存在になりうるのだという立ち位置を、意識的に提示しているのかもしれない。

第一部「太陽旗」、第二部「虹の橋」あわせて4時間36分という長さにもかかわらず、一度もあきることにはなかった。監督の力量とこの作品にかける情熱を感じる。

映画は一八九五年の日本による植民地化からの台湾史を可視化したという点でも興味深い。最初に台湾に進軍してきた日本軍の軍服は戦闘服というより帝国の威厳を示すための大時代的な意匠に満ちていた。その日本陸軍が戦闘の果てに踏みつけたのが、虎がデザインされた台湾民主国旗だった。この旗は日本の台湾植民地化に反対した清の在官官僚が一時的に作った台湾共和国の国旗であるのだ。そして霧社事件が起きる一九三〇年には日本陸軍の軍服がカーキ色になっているなど時代考証の微細さを観賞する楽しさも私たちに与えてくれる。

反対に映画の中で服装が全く変らないのが、セデック族の人たちである。男も短いスカートのような民族衣装を着て、集落を意味する「社」によって異なる色とデザインの長い布地を身に巻きつけている。男は額と頸に太い縦棒の刺青を施し、祭りとなれば口琴を鳴らして雄々しく踊る。巫者のような女性が社が置かれた状況を即興で歌で表現する。狩猟を生業とする人たちだから「狩り場」の確保をいのちと引き換えても優先し、他の社者たちが侵入してくると闘つて守る。その戦闘の最中に「出草」という首刈りする。

そうしたセデック族の人たちも日帝時代が35年も続くと、服装は変らないものの、片言の日本語をしゃべるようになり、学校や郵便局といった近代的施設を受け入れるが、狩り場は権力によって奪われ、肉体労働者として生きるだけとなる。そうした彼らが決起したのは、彼らの精神的・倫理的規範である「掟」に忠実に生きようとする強い意思であったのだ。

### 詩と評論

月刊『Mélange』VOL.81  
めらんじゅ

2013年05月26日 通巻81号  
発行所/月刊『Mélange』編集部  
〒650-0012 神戸市中央区北長狭通 1-7-1 2F  
編集人/大橋愛由等 (『Mélange』同人)  
Mobile 090-5069-1840  
maroad66454@gmail.com  
定価 500円 (税込)